

文字をうばわれたじいちゃんばあちゃん達

二日市北小学校五年 松尾 姫花

わたしは、児童センター（隣保館）という差別をなくす活動をする場所に通っています。

センターの横に、いこいの家という場所があります。そこには、部落差別によって学校に行けなかったじいちゃんばあちゃん達があります。そのため、ひらがなは書けても、漢字はあまり書けないそうです。しかし、そんなじいちゃんばあちゃん達が今、ほぼ毎日、文字を書く練習をしていると聞きました。

わたしは、すごいなと思いました。わたし達は、学校に行けばいろいろな勉強や漢字などを、当たり前のように学ぶことができているけど、じいちゃん

んばあちゃん達は、部落の人だからと差別されて、学校に行けなかったそうです。そんなじいちゃんばあちゃん達は、差別によって学校や文字をうばわれてしまったけど、今、いこいの家で文字の学習にはげみ、漢字検定などを受けてがんばっています。

去年、わたしが、漢字検定を受ける時、同じ級を受けたおばあちゃんがいきました。そのおばあちゃんも合格できるように、わたしと同じように勉強をされていて、見事合格していました。わたしは、その時どれだけ努力したんだろうと思いました。

センターで差別のことを勉強しているなかで、一番よく話をされるのがこのじいちゃんばあちゃんのことです。じいちゃんばあちゃんにかかわる話をしてもらったり、本当に差別を経験したじいちゃんばあちゃんに、どんな気

持ちだったかを聞いたりしました。やっぱり「つらかった。」「苦しかった。」などと言っていました。

わたしは、「ひらがなにつき」という本を読みました。その本にもじいやんばあちゃん達のように、文字をうばわれたおばあちゃんが登場して、ひらがなにつきを書くというお話でした。最初にその本を読み聞かせしてもらった時は、実際にあったことじゃなくて、つくり話だと思っていました。しかし、その本はつくり話じゃなくて、本当の話だということが、いろいろなことを学んで、考えていくうちに分かりました。その時わたしも、むかし文字をおぼえるのが苦手で漢字検定で合格するために、一生けん命何度も何度も練習をしたことを思い出しました。

実際に文字をうばわれたじいやんばあちゃん達はたくさんいて、文字を取り戻すために、一生けん命努力していることはあまり知られていません。

覚えよう、使えるようになろうと努力する姿は本当にすごいです。

わたしは、たくさんの人がこの事を知って、考えてほしいと思ってこの人権作文を書きました。わたし自身も、もっと差別のことについて勉強して、差別をなくす一人として、活動をしていきたいと思っています。